



Oregon Health & Science University (Ashland) におけるTeaching Clinical Judgment through Simulation:An Intensive Workshop for Nurse Educators に参加して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2010-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 工藤, 真由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000511

学 術 活 動

海外研修報告

Oregon Health & Science University (Ashland) における
Teaching Clinical Judgment through Simulation:
An Intensive Workshop for Nurse Educators に参加して

基礎看護学部門 工藤真由美

2009年8月3日より5日の3日間、オレゴン州アッシュランドの Oregon Health & Science University (本校は州都 Portland にあり、Ashland 校は分校にあたる：以下 OHSU) で開催された「Teaching Clinical Judgment through Simulation: An Intensive Workshop for Nurse Educators」に参加したので、その研修内容を報告する。この研修への参加の動機は、新たな看護教育方法を開発するという私自身の研究目的にある。近年、基礎教育を終えた新人看護師が、複雑さの増す臨床現場に適応するための実践能力が問題視されている。しかし、免許修得前に実践的な実習を行い、実践能力を養うことは困難な状況である。よって患者の安全も確保するためにも、より実践に近い演習を行い、実践能力を育成する教育方法の開発が急務と考えた。現在、テクノロジーの進歩に伴い、より高い再現性 (High-Fidelity) をもったマネキンが開発され、それをコントロールするコンピューターソフトにより、「実践の中で考える」ような演習が可能となっている。OHSU では、Simulation & Clinical Learning Center (以下 SCLC) をもち、そこで看護学部生、大学院生、医師の教育を実践している。SCLC には、常駐のスタッフがあり、その学生への指導 (シミュレーション教育の運用)、プログラムの開発、評価を行っている。シミュレーションの各コースはカリキュラムと統合されており、臨床教育に不可欠なものとなっている。

このワークショップは、シミュレーション教育を実施するために教員、また臨床における教育者がその運用内容を学ぶものであった。コース内容は①シミュレーション教育の概要、②シナリオの作成、③ debriefing & reflection の方法、④シナリオ作成演習とシミュレーションの実践である。実際、シミュレーション教育を実施するためには、High-Fidelity なマネキンとコンピューターシステムが必要である。しかし、この OHSU のシミュレーション教育はそのようなハードな部分の充実はもちろんであるが、その教育を支えるソフトの部分、学習のため

の概念モデルが明確であることが重要であると考えている。確かに、シミュレーション教育においてハード部分は不可欠であるが、しかし、「もの」があってもそれをどう学習と結び付けていくかが明確でなければ効果はない。この学習のコアとなっているのが、Tanner 博士の「Clinical Judgment Model」である。シミュレーションはこのプロセスに沿って行われている。このモデルがこの教育の前提となり、そこに何を学んでいくかという検討、すなわちシナリオが作成される。本ワークショップでもこのシナリオ作成と、この後の debriefing の方法がメインとなっている。

シナリオの中に盛り込まれるコンテンツは、「参加者 (学生) はその場面でどのような役割を取るか」、「心理的側面」、「身体的側面 (どのような症状があるか、バイタルサインも含む)」、「態度、姿勢」、「技術は何を求めるか」、「患者のタイプは」、「どれくらい複雑な場面とするか (難易度)」などを様々な側面を考えつつシナリオを構築できるテンプレートがあり、それに学生、教育目標に合わせたシナリオを作成していく。

私の参加したグループでも一つのシナリオを作成し、実践した。作成されたシナリオは実にユニークな内容であった。場面は訪問看護であり、脳梗塞で療養中の患者の状態を見に行くといった内容である。そこには夫 (患者) の介護ストレスでアルコール依存症にある妻がいる。そこで夫の状態をアセスメントし、またその介護者である妻の状態をもアセスメントすることを求める。夫役にはマネキンを使用する。夫の声、反応はマジックミラーの向こう側にいるインストラクターとしての私たちのグループが学生役の反応をみながらその場に応じた反応をしめす (写真参照)。妻は、汚れた服を着て、顔には転んだ跡があり、昼間からお酒を飲み、千鳥足である。

もちろん、シミュレーションルームもその家庭の一場面として構成する (夫はリクライニングベッドに横たわり、妻は、その横の机で雑誌を読んでいる。その机の

上にはワインボトルがある.)。学生役は、ワークショップ参加の他のグループメンバーであった。参加者はベテランの看護師、教員の方々なので、戸惑うことなく対応していたが、これが学生ならこの場面、構音障害の夫の訴えを聞きながら、状態観察をし、なおかつ介護者の妻の状態もみるという複雑な場面に戸惑うことだろう。そして、このシミュレーション終了後、学生役とインストラクターが debriefing を行う。学生はここで自らの実践を振り返る (reflection)。このシミュレーションを通じて、何が達成でき、できなかったか、何が困難だったか、この場面でのアセスメント、また必要な介入は何か、などの debriefing を行い、学生自身が実践の中で何をどう「考え」ながら動いたかを、言語化して、このシミュレーションの課題の中での自らの問題を明らかにする。もちろん教員は、学生のシミュレーションの状況（ある意味一挙手一投足）を観察しているので、その実践内容の意味をそれぞれに質問し、学生自身気付いていない自らの行動の意味を再度考えることになる。

よって、OHSU におけるシミュレーション教育は実践そのものと、実践を行わせる（に至らせる）思考を振り返り、「何を学んだか」を明確に学生に認識させることにある。その明確な認識が「学び」となり、次の学習へとつながっていく。

マネキンはどう見ても人形である。しかし、演出によってここまでリアリティのある場面を再現できるという点において、シミュレーション教育は、技術と思考の両方を学習できる教育方法として、有用であるといえる。

しかし、実際にこの教育方法を実施するにあたっては、様々な障害がある。High-Fidelity なマネキンは1000

万円以上かかり、その他附属設備についても高額である。加えて、この教育を運用するためには、この教育方法に熟練した教員（インストラクター）が必要になる。カリキュラム上にどのようにしてこの内容を盛り込んでいくかなど、ハード、ソフト両面において考えるべき要素は多い。

「どう教え、どう学んでいるか」という教育のプロセスの明確化こそが、アウトカムを得にくい教育という活動の評価を可能にする方法であると考えられる。今回の研修でハード面に注目されがちなシミュレーション教育の、教育方法のソフトな部分を構築していくための方法論を学ぶことができた。今後、この経験を看護学教育に還元できるかが自身の課題である。

※本研修は平成21年度本学研究支援事業（育成研究）の助成を受けて参加した。



モニタールームから、マジックミラー越しにシミュレーションの様子を観察し、コントロールする。

